

少しだけ文学の世界に浸って！

●古河のまちを歩く・その3！

11時30分に「鷹見泉石記念館」を出て、掘割に沿って石畳の道を歩いて3分、博物館に隣接する形で建っている

「古河文学館」

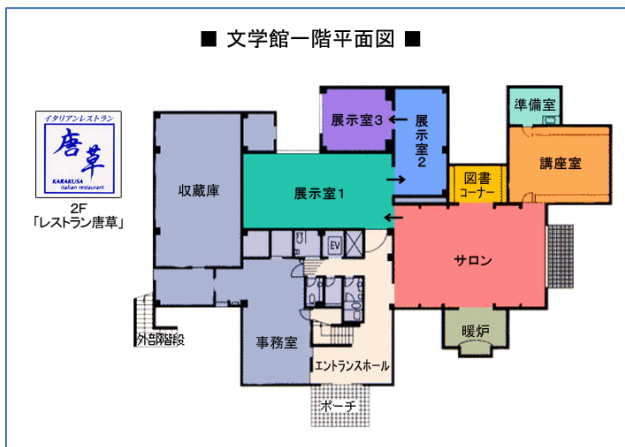
【写真①】に到着します。

◆古河文学館

平成10年(1998年)10月、茨城県で初めての文学館として開館。



古河ゆかりの文学者に関する展示室を中心とし、サロンや講座室も設けられている。イタリア料理のレストラン「唐草」も併設されている。サロンではコンサートや朗読会が開催されるほか、1930年頃に英国のE. M. ジーンが作成した蓄音機「EMG マークXb」が置かれ、定期的にSPレコードの観賞会が開催される。講座室は句会、歌会、文学講座に利用されている。【以上、ウィキペディア】



【展示室1】古河ゆかりの文学者たち

展示室1では小林久三、佐江衆一、粒来哲蔵、粕谷栄市、山本十四尾、沖ななも、松本進、一色悦子、金田常代、金田卓也、逸見猶吉、和田芳恵、若杉鳥子等をはじめとする、古河にゆかりのある文学者を、その作品と肉筆原稿等の資料を中心にして紹介します。併せて、古河が舞台として描かれている作品なども紹介しています。



【展示室2】鷹見久太郎と絵雑誌「コドモノクニ」

大正11年(1922)、児童文学史に燦然と輝く絵雑誌が登場しました。鷹見久太郎主宰の東京社から発行された『コドモノクニ』です。従来の子供向き

の雑誌に比べ、大判で厚手のマット紙に、見開き画面いっぱい印刷された美しい絵と童謡、さらに童謡には曲・振付等も付されていました。



に中山晋平を配するなど、当代一流の諸氏を迎えて作られた誌面は豪華でモダン、まさに絵本の王様とも呼べるものでした。

昭和6年、鷹見久太郎は諸事情から東京社の経営権を譲渡しますが、幼児教育のための出版事業への熱情は冷めやらず、昭和8年には「コドモノテンチ」を創刊しています。展示室2では「コドモノクニ」とその後継誌ともいえる「コドモノテンチ」の関連資料を、さまざまなテーマに沿って紹介します。

【展示室3】歴史小説家 永井路子

古河出身の歴史小説家・永井路子ゆかりの品々と



代表作品を展示しています。直木賞受賞作『炎環』、女流文学賞受賞作『氷輪』など「永井史観」ともよばれる独自の歴史解

釈をもとに描かれた作品世界を紹介します。また、寄贈された数々の蔵書や貴重な資料は古河文学館の中核をなすもので、古河市の大切な文化財産といえます。現在は数多い永井作品をテーマ別に展示しています。

【以上、写真と文は「古河文学館」HPより】

* *

今回、展示室1では、「コドモノクニ」へ作品を提供された童話作家・武井 武雄さんの特集がされていました。武井 武雄(1894年6月25日-1983年2月7日)は、童画家、版画家、童話作家、造本作家で、童話の添え物として軽視されていた子供向けの絵を「童画」と命名し、芸術の域にまで高めた方だそうです。

